現代政治論　第２回小論文課題　「政治における個人の存在」
総合政策学部１年　遠藤　忍（70701546・s07154se）

古典パッケージより引用した文献

- アマルティヤ・セン「自由についての見解」、『自由と経済開発』（1999=2000）
- 上野千鶴子「日本型近代家族の成立」『近代家族の成立と終焉』（1994）

――以下本文――

政治の世界では、個人が成立する基盤は存在しえないのか、という問いがあれば、私は「いや、存在する」と答える。政治の世界は個人があってこそ成立するものであると考えるからだ。仮に、個人が成立する基盤が無いとすれば、その政治が作る社会は、本来社会の構成要素たるはずの人間の存在を忘れてしまうのではないかと考える。

デービッド・イーストンは、政治とは希少資源をめぐる競合である、としている。世の中に存在する資源のほとんどには限りがある。エネルギーやマテリアルはもちろん、食物も、労働力（人間には寿命がある）も、地球それ自体も、無尽蔵とは言えない。限りある以上、すべての人が自分の欲しい分すべての恩恵を受けることは出来ない。そこに発生する競合をおさえ、資源配分を定めていく営みが、私が考える政治であり、資源配分の方法がイーストンの言う政策である。

政策の実施は、個人生活に大きな影響を与える。現在の経済的状況や地位などは、先行する政策の結果生じたもので、今後の生活は政策の影響を大きく受ける。競合による暴力を防ぐ事が出来るのは、政策が権威的な決定により生まれるからである。政策に従わない場合の制裁は正当であるとされ、つまり政策は拘束力を持つ。以上の事は政治を稼働させる要件であると考えられるが、もう一つ、政策は可変性を持つという事を挙げねばならない。つまり、一度決まった資源配分は社会の実情に応じて変化できるのだ。

ここで疑問が生ずる。政策に権威を与えるのは誰か、政策を変化させるのは誰なのか。私の答えは、“個人”である。社会では、資源を配分していく上で、個人間の対立を避けるために、大多数の個々人の了承の上で政策を決定する。すなわち政策は個人間の同意のもとに作られる。その同意を破った個人に対して他の大多数が制裁を加えるのはルールとして正当である。さらに各個人の実情にあわせて、政策の変更あるいは新しい政策の実施を要求するのも、個人である。

一見すると、政策の決定と実施において、個人の存在は見えづらいが、政策は個々人の意見対立と妥協と合意の上に成り立っており、それゆえ政治の世界では、個人が果たす役割は大きい。その事を、２つの文献から考えようと思う。

先ほど、個人と政策について述べたが、政策が経済開発のために行われるならば、

個人の自由が大いに尊重されねばならない。アマルティヤ・センは「自由についての見解」で、開発と個人の自由について述べている。ここで言う自由とは、「医療、職業教育、収入になる働き口、経済・社会保障などの基本的機会」（セン、1999=2000：14)の自由や、「政治的自由と基本的な市民的自由」（セン、1999=2000：15）などの「人間の本質的自由」（セン、1999=2000：26）である。これらの自由が保障されていないところでは、飢餓・貧困が発生するなど、政策がきちんと施されないままになる。反対に、「より多くの自由は、人々が自らを助け、そして世界に影響を与える能力を向上させる。そしてこれらは、開発のプロセスにとって中心的に重要な事なのである」。（セン、1999=2000：17）ここで重きを置かれるべきは、自由を持つ個人の「エージェンシー」（セン、1999=2000：17)、つまり、「経済的、社会的、政治的行動への参加者としての個人の役割」（セン、1999=2000：18）である。この事から、やはり個人が政治に対して及ぼす影響は大きいと考えられる。

次に、この論文の冒頭の問いに対して、上野千鶴子の「日本型近代家族の成立」にみる、「家」制度という、一種の社会基盤に目を向けてみる。明治民法下における「家」制度は「家父長制」、言い換えれば「『男性が女性を支配し、年長の男性が年少者を支配する』社会構造」（上野、1994：74）であり、「法的平等の背後に性別役割分担による社会・経済的不平等があるところでは、戦後家族においても『夫の支配』は継続」（上野、1994：76）している。一見すると、家長が大きな権威を持ち、家族を構成する、個人としての妻や子どもには個人の尊重が無いように見えるが、そうとも言えないと考える。確かに「家」制度において家長以外のメンバーにとっての自由は少ないと言える、しかし「家」制度の根幹には、儒教の「『修身斉家治国平天下』に見られるように、自己を中心に同心円的に倫理を拡大していく」（上野、1994：72）考えがあるという点で、「家」という社会が一方的に存在するのではなく、個人の存在を元にしてこそ、社会基盤として成り立っていると考える。

いずれにせよ、政治の世界において個人が無視されてしまう事は、政治の形骸化であると考える。政治に影響する一番小さな単位は個人であり、政治の影響を受ける一番小さな単位も個人ではないか。政治の世界には、個人が成立する基盤が存在し、逆を言えば個人の成立無しで政治が存在するとは、私には考えられない。(1966 字)